

『後撰集新抄』翻刻(四)

日向一雅

A Transcription of *Gosenshū Shinshō* (IV)—————

Gosenshū Shinshō, published in 1814, is a representative commentary on the *Gosen Waka Shū*. It was once reprinted between 1910 and 1912 by the Kasho Kankōkai but has since become a rare book. According to the General Bibliographical Index there are only ten complete sets in existence. Although unlisted in the Index, the library at Seishin Joshi Daigaku is in possession of all 15 volumes of the set. In vols. 64, 66, 67 and 68 of *Seishin Studies* I presented a transcript of the "Bekki" volume and volumes I, II, III and IV. For this issue I have transcribed volume V.

後撰集新抄秋上 五(外題)

後撰和歌集卷第五新抄

秋歌上

是貞 惟貞親王の家の歌合に

よみ人しらず

○一本に、是貞とある方然るべし。是貞ノ親王は、光孝第二の皇子なり。此歌合の歌、古今にも此

集にもをりく見えたり。

三七

にはかにも風の涼しくなりぬゆき 萱方るか秋たつ日とはうべもいひけり

○一首の意明らかなり。金葉秋「とことほにふく夕暮の風なれど秋立日こそすとしかけりけれ。うべは、

諾にて、其事をげにと諾つべなふ意なり。古今上秋「吹からに秋の草木のしをるればうべ山風をあらしといふら

ん、など皆同じ。

題しらず(ニオ)

三八

うちつけに物ぞ悲しき木の葉ちる秋のはじめをけふぞと思へば

○木葉も散りてさびしくなる秋の初を今日ぞと思へば、ふとさしあたりて、まづ物悲しく覺ゆとなり。う

ちつけには、ふとさしあたりたる意なり。古今^{名物}「うちつけにこしとや花の色を見んおくしら露のそむるばかりを、など皆同じ。」此歌などのてにをば、末句より上へ返して見れば、意得やすきなり。此格の歌ども、詞の玉鐙巻二に、古今六、山嵐は「冬むかしも、古今二」此里にたびねしぬべし一桜花ちりのまがひに家路忘れて、などいと多く出されて云、すべて、てにをばの辭にて留りて上へかへる意の歌は、いづれもみな、其留りのてにをばは、かならず上の詞の切るゝ所までへかゝるやうによむ事なり。右にあげたる歌共を考ふべし。昔「の点より一のしる迄へはかへれり。一は筋の切るゝ所のしるゝ所なり。然るに後世には、此格をしらで、留りのてにをばは、或は初句の詞などへのみかゝりて、其詞の切るゝ所迄へはかへらぬ歌の多きは、皆ひがことなり。はじめの詞へはかゝらぬも難にあらず。たゞ切るゝ所までへかゝらざれば、一首の題と、のはずとしるべしとたりれ（二ウ）

物思ひけるころ、秋立日、人につかはしける。^{待ける 異}

○恋の上にて、人のつれなきゆゑの物思ひなり。歌の詞にてしか聞えたり。

三九 たのめこし君はつれなし秋風はけふよりふきぬ我身悲しも^{な 六帖}

○此年月我に頼に思はせ来りたる君は、つれなし。其上に、君の我を厭たりといふ事もいちじるく、あきといふ詞の秋風はけふより吹初る。さて、我身はモウ悲しき事なるよとなり。

思ふ事侍けるころ

三〇 いとゞしく物思ふ宿の萩の葉に秋とつげつる風のおびしさ^{上 異}

○かく物思ひをして居る宿の萩の葉に、物悲しき時節の秋になりたるぞと告たる風が、弥以てわびしき事よとなり。初句いとゞしく（二モ）は、末句のわびしさへかけて心得べし。

題しらす

三三 秋風のうちふきそむる夕暮はそらに心ぞわびしかりける

○抄に、空に心ぞとは、何となくわびしき心なりといへり。げにこは何とさして定めたる事もなくわびしく思はるゝ意なり。此そらにと云詞は、俗言にメツタコクウニと云意にやゝ近し。兼輔集に「はる霞たちつる方をながめつゝそらなる恋も我はするかな、とあるなど似たる遣ひざまなり。猶いはゞ、そらとは、すゑろに云々などいふにもやゝ近く、おちつかぬ意ある詞なり。万葉には「心空なり土はふめどもといふ歌教首あり。瓶麻呂云、そらのそはそこ其処などいふその裏にて、空虚ウツなどの虚にて、其とさだめたる事なきなり。(二三)

大江千里

三三

露わけて六帖かけし袂異ほすまもなきものをなあるものを一本ど秋風のまだきふくらん

○恋歌にて、近きころ逢そめて、其わかれつる時ぬらしたる袖を、ほすまもなき程なるものを、いかで人の心には、はや秋風のふくらんといふ意なるべし。又思ふに、此作者の歌には、詩ノ句の意をよまれたるものをりゝ見ゆれば、もしはさる事などある歌にやとも思へど、いまだ思ひ得ず。

女のもとより、ふみ月ばかりにいひおこせて侍ける

※つかね權云、文月ばかり、兼平朝臣の許にいひ遣して侍ける女

よみ人しらず

三三

秋萩を色どる風のふきぬれば人のこゝろもうたがはれけり

古今四庫「秋風に山の木の葉のうつろへば人の心もいかゞとぞおも(三五)ふ。

返し

在原業平朝臣

秋の野大和物語を色はやくともどる風はふきぬとも心はかれじ草葉ならねば

古今五庫「人を思ふこゝろ木の葉にあらばこそ風のまに／＼ちりも乱め。此二首、大和物語には、そめどのゝ内侍といふいまそかりけり云々の、次の条に、おなじ内侍に、在中将すみける時、中将のもとによみてやりける、「秋はぎをいろどる風は云々とありければ、かへし、「秋の野をいろどる云々と見えたり。

源昇朝臣、時々まかりかよひける時に、文月の四五日ばかりに、なぬかの日のれうに、さうぞくてうじてといひつかはして侍ければ(三ウ)

※つかね權云、みなもとののぼるの朝臣、時々まかりかよひける時に、文月四五日ばかりに、なぬかの日のれうに、さうぞくてうじてといひおこせて侍ければ

○なぬかの日のれうには、七日の差料になり。さうぞくは、装束。てうじては、調じてなる事は、上中春に巳にいへり。装束調じてと云々は、調じてくれよといひおこせたるなり。かくさまに残る意をふくめて、と又など、受たるはことに多

く又などにはかぎらず。いひさして意をふくめたる詞、くさくあるなり。これは圖書にも、消息文にも、物語書などの人と人と物いひかはす所の詞にもいと多し。其所にしたがひて、よく心して見るべき事なり。

閑院

事は一本

三五 あふ事はたなばたつめにひとしくてたちぬふわさはあえずぞ有ける

○君に逢ふのまれなる事は、織女にひとしくて、衣を裁縫カタミなどする方のわざは、織女のよろしきにはあやかり侍らぬぞとなり。たなばたつめは、機織女にて、つは助辨なり。たなはた妻(ツマ)の意にはあらず。織女タナバタなり。後世の俗に、七ツと書て、タナバタとよ(四オ)むはいみじき非なり。二星を祭るは

三天

天川わたらん空事異もほえずたえぬわかれとおもふ物から

題しらず

よみ人しらず

七月七日の事なるによりて、七夕歌と万葉などにも書たるを、心得たるものなり、又全女はたといふは、此たなばたつめを略きたる詞にて、即織女の事なり、万葉にも、織女をたなばたとよみたる所あり。此たなばたといふをも、後世には、二星に通はしていふ如く心得たる人のあめるも、非なり。然れども、かく心得願れるゆゑは、七夕の祭は、まづは婦人(ランナ)の織織(オリヌヒ)などの手業のためにする事にて、むねとは織女を祭る。さて、織女は機織る事なれば、いふにも、たなばた祭といふより、おのづから二星に通はして、たなばたといふ事の如くはなりたるべし。さて、織女は機織る事をつかさどるといふよりして、衣縫事にもいへり。万葉十「いにしへゆおりてしはたを此ゆふべ衣に縫ひて君まつ我を、」足玉も手玉もゆらにおるはたを君がみけしにぬひあへんかも、なども見えて、此集などのころとなりては、もはら敷縫事にいへりとおほしく、帯木巻にも、そのたなばたのたちぬふ方をのどめて、長き契にぞあえましなども見えたり。あえは、俗にあやかるといふに同じ。やがてあやかるといへるは、拾遺集に「風早みぎの事案のとも」

〔四〕すればあかりやすき日本紀応神の御巻に、肖此云阿叡とありて、古今集の一本上、又新撰六帖に「こよひこん人にはあはじたなばたの久しきほどにあえもこそすれ、貫之集「ひさにこぬ人をまつにやあえぬらんときはの恋と我はなりぬる、伊勢集、甲斐へくだる人に、「君がよはつるの郡にあえてきねさだめなき夜のうたがいもなく、など猶多し。

○七夕の後朝の意と聞ゆ。今かく別ても、なほ年々逢ふべき、絶ぬ契にて、いつもの別ぞとは思へども、

さしあたりて、天川を渡り帰らん方を、そこしも覚えず悲しとなるべし。渡らんそらは、渡るべき方五才を其所ツツとしも覚えぬ意と聞ゆ。若紫巻尼君のいとよわりなり給ひて、紫ノ上君のいとけなに見おきて身をまからんと、なげき給ふところに、「おひたゝんありかも

しらぬ若草をおくらす露ぞ消んそらなき、とあるなど似たる遣ひざまなり。考へ合せてさとするべし。かくさ

詞の類例など引出たるには、猶近き集などにあるもあるべし、見ん人いたくながめそ。まに

七月七日に、ゆふさり。方までこんといひおくり一本。て侍けるに、雨ふり侍ければ、までこで

※つかね鐘云、七月七日に、夕かたまでこんといひつかはして侍ける人の許に、雨ふり侍ければ、まからていひ遣しける

藤原長忠 一本
源中正

三七 雨ふりて水まさりけり天河こよひはよそに恋んとや見し

○一首の意は明らかかなり。但、こよひはといふに力あり。二星だに逢ふといふ夜なれば、こよひは必ずと思ひつるにといふ意なり。(五〇)

返し

よみ人しらず

三六 水まさり浅き瀬しらずなりぬとも天のとわたる船はなしやはらん興

○天のとは、空の青きを水門みづかどに見なしていへる事、古今秋に「秋風に声をほにあげてくるかりはあまのとわたる舟にぞ有ける、などの如し。されど此歌にては、即チ天河の川門かふかどの事にいへるなり。一首の意は、雨のふり水のまさりて、かちより渡らん浅瀬はしられぬやうになりたりとも、彥星の如くに、天の川門を渡る舟はあるべきものをとなり。雨にかこつけ給へるがうらめしきといふ意をふくめたるなり。此二首は我中を二星になぞらへていへるなり。

なぬかの日に、女のもとに遣しける

藤原兼三 (六オ)

三九 たなばたもあふ夜せ異ありけり天の川此わたりにはわたる瀬もなし

○此わたりは、此あたり(此所傳)といふに同じ。我方をいへるなり。常に天河を隔居て、逢事のかたき織女も、今夜七月七日といふ逢夜はあるよな、然るを此我等が中には逢瀬もなく、織女にもおとりたる中なりといふなり。

かれかたにけりける 異
かれにける男の、七日の夜まできたりければ、女のみみて侍ける

○上に男のといふ事あれば、女の云々はなくて有べしと、つかね緒に見えたり。

読人しらず

三〇

ひこ星のまれにあふ夜のとこなれば 異とこなつはうちはらへども露けかりけり

○牽牛の如く稀に來給ひて、かく逢ふ夜の床なれば、今まで長く逢は(六ツ)ぬ間に流したる涙にて、今さららに私へどもく猶露けき事に侍るよとなり。此歌、孟津抄帶木邊「うち私ふ秋も露けきとこなつ」に、ひかれたるに

は、末句「打私ふにもとあり。さる本もありしなるべし。季吟法印の抄に、まれに逢夜の床は、あふにつけ

ても袖ぬるゝ心なり。床夏を床にそへて、露も縁になる詞なりとあるは、此孟津抄の方の末句にかなへり。

羅妻を床にそへたるは、古今夏「ちりをだにすまじとぞ思ふ」牽牛星をひこ星と云は、和名抄に、爾雅注云、牽牛一名河鼓和名
吹しりりもと我がぬる常夏の花などなほいと多かり之、又以叙織女、兼名苑云、織女牽牛是也。和名太素とあり。かくて、ひこはひめに對へて、貴人のうへの称比吉保

なれば、古事記日本紀などに、神の御名より初めて、いと多く見えたるおもよきにて明らかなり。二星の交会アツといふ事を、男女彦のなからひの如くいひならはせるよ

り、皇国の貴人の称のひこひめにあてマセと、彦星とはいへるものと見えたり。こは例の事のついでにいふのみなり。

なぬか、人のもとより返事に、こよひあはんといひおこせてはべりければ

○こは、七日とありて、なぬかのひとよむべきを、後世心にて、なぬかと写なせるなるべし。一本
には、七日の夜とあれども、歌によるに、夜のことゝは見えず。なぬかやうかのかは、ひとつふたつのつに同じく、
かぞへる調なりと、藤原ノ大人いはれ、此調のかの

言は、来経(キキ)の約りたるにて、幾(イク)かの日(ヒ)といふ、日ノ字と置れるにはあらざるよし、
藤原ノ大人もいはれたり、古今集の調書に、なぬかの夜の夜よめる、とあるをも、引合せて思ふべし、

そ一本らん 伊勢集

こひくゝてあはんと思ふ夕ぐればたなばたつめもかくやあるらし

○一首の意明らかなり。(七ウ)

かへし

たぐひなきものとは我ぞなりぬべきたなばたつめは人目やはもる

○織女は稀には逢へど、人目をば憚らぬを、我はまれに逢ふうへに、人目をもはぶかれれば、わびしさも織
女にもまされり。よりてたぐひもなきものといはるゝやうにならんとなり。人目をもるの、もるといふ調の
ことは、すまに變くいふべし。

題しらず

三三 天川なかれてこひばうくもぞあるあはれと思ふせにはやく見ん

○折を待などして、心におもひて月日をおくりなば、もしうきせに交らんもしられず、さやうにては悪
ければ、今かくあゝはれ逢ひたき事やと思ひつめたる時節に、早く逢見んとなるべし。上二句は(ハセ)、
織女の如くに月日を長く恋なばといふ事にて、みづからの恋の歌なり。織女の心になりてよながれては、
みたるには非ず、長経の
約りたるにて、月日にても年月にても、長く経る事なり。天川の縁にて、流れて、
かけたるは驗なし。あはれと思ふせにとは、此方の

あゝはれ違ひたやと思ひつめたる、其時にといふなるべし。向(ササキ)の人のあはれかくさまにいへるせは、さし
と思ふ案にはあらじ。あたりたる其時節をいふなり。うきせうれしきせあふせなども皆同じ。又新古今夏に「きかずともこゝを
せにせん郭公山田の原の杉の村たち、とあるなどは、いさゝか異なるつかひさまにて、こゝを其所にせん
といふに近けれども、もとの意は一つなり。三ノ句、もその辭は、行末をかねておしはかりて、あやぶむ意のてにをはなり。常のぞと
云べき所をも、するにやうにむすびたりと、玉緒巻三、十九葉下
要く見えたり。もこそこのつかひさまも、此もぞにおなじ。(八ウ)

三三

玉かづらたえぬ物からあらたまのとしのわたりはたゞ一夜のみ

○万葉十に出たる、ナカノノミヒ七夕の歌にて、三四の句「さぬらくは、年のわたりに」とありて、二星の契は絶ざ
る物ながら、逢て真寝る事は、一年の間を恋渡りて、たゞ今夜一夜のみなりといふなり。玉薦は、たえぬ
といはん料の枕詞なり。年のわたりとは、織女の一年の間を恋わたるをいふ。同巻万に「年にありてけふ
かまくらんぬは玉のよぎりがくりにとほづまの手を、又「年の恋こよひつくしてあすよりはつねの如くや
わがこひをらん、などあるも、一とせ恋わたるをいふなり。かくて、四ノ句万葉に、年のわたり」とある
ぞ正しき。もしは、仁にを仁はと写誤れるにもあらんか。又思ふに、此集の頃となりては、年のわたりといふ
事、体言の如くなりたるさま次下に「年のわたりによりぬる物を、なれば、もとよりはとありしにもあるべし。

三三

秋の夜のこゝろもしるくたなばたのあへるこよひは明ずもあらなん

○秋の夜は長きものぞといふ、其意もげにと灼然イシツク知らるゝやりに、織女の逢ひたる今夜は、不明フシクもあれか
しとなり。

三三

契けん言の葉今はかへしてん年のわたりによりぬるもの（七十一本）を

○例の我が恋の歌なり。長く心かはらじ、しば／＼逢はんなど、契給ひたる言葉は、もはやかへしまるらせん。今は契たるかひもなく、二星の一年の間に只一度逢如くなる中になり果たるものをとまり。

初句契けんといへるは、今は契たるかひもなくなり果たるをりの事なれば、しか／＼とやうに契給ひたりしやうなるが、其言葉は、などいはんが如く、わざとおほめきたるさまにいひたるものなり。此（九）類いと多くありて、おもしろきいひやうなり。心をつくべし。さて此末ノ句、よりぬるとあるは、もしはなりぬるの、なをよに見誤まれるか。又は、ちあなどの文字を、ちよなどに写しあやまれるにてもあるべし。壺麻呂云、此末句誤にはあらじ、本のまゝにてよろしかるべし。さるは、年の渡に片づきたる事に、寄ぬる帰ぬるなどの義にて、成ぬるといふに、いくばくも違はざる言と聞ゆ。俗言に、年ガ寄タといふと、老ニ成タといふと、同語なるを思ふべし。猶例もあるべけれど、今ふとは思ひ出すといへり。師云、げによると云言は、つくと云と同意にて、秋になるを秋づくともいへば、此（十）よりぬるの説もよろしかるべし。されど又上の、なの誤ならんとの説もすてがたしといはれたり。〔下〕

なぬかの日、越後藏人につかはしける

○越後ノ藏人は、女藏人（ニメカウラト）なり。

藤原敦忠朝臣

三三

あふことのこよひ過なばたなばたにおとりやしなん恋はまさりて

○上ノ句は、二星すら逢ふ今夜だに、逢はで過なばといふ意なり。おとりやしなんは、劣（オトリ）や為（セ）んといふに

近し。素性集「まれなればゆゝしと思ひしたなばたにけふはおとれる身をいかゞせん。

七日の日

よみ人しらす

三六

たなばたの天のとわたる今夜さへをちかた人のつれなかるらん

○かの人、常々つれなきさまなるが、二星だに逢ふといふ今宵さへ、猶つれなき事かな、いかでかくま
ではつれなかるらんと云て、さて(十)もこよひなどは、心とけたるさまをも見せよかし、といふをふく
めたるなり。上下の句の間に、いかでと云事を加へて聞く格なる事、上いへるが三ノ句のさへは、常々つれなきがうへに、今
如し。さるは、四ノ句をちかた人のの文字に替方ある事なればなり。

夜も又といふ意なり。万葉に、副の字をサへとよみたり。もとよりあるがうへに、又添はる意の詞なれば
なり。古今上「梓弓おして春雨けふ降ぬあすさへふらば若菜つみてん、とあるなど、すべて皆同じ。さへは、
サへ

すべて此事のあるうへに、又彼事もそひくは、すべをちかた人は、彼方人にて、俗言に彼人といはんが如し。をちこちも、彼
るやうの意なる事、玉露にいはれたるが如し、方此方にて、かなたこなたといふに同じき事、万葉に、彼此と書きたるにてもしるべし。此をちこちせ、遠近と
もかけるよりたゞに遠

近の意とのみ、心奪換れる人もあり、をちこちと対へいふ時は、げにおのづから、遠近の意にも通へども、さりて、をちは遠、
こちは近なりと心得るは非なり。されば此歌などの意、遠方(ヲチカカタ)人と見てはさらに聞えず、よく思ふべし。(十一オ)

七夕をよめる

○此詞書、万葉には七夕とのみ有て、そはナヌカノヨヒとよむ事なり。今此所に七夕をとあるは、
織女をと云意の如く聞えて、少し心ゆかず。七夕と書て、タナバタとよむ事の非
七は、上に委くいへるが如し。こは七夕にとありしを、後に

をと写誤れるにもあるべし。但しかくても、ナヌカノヨヒヲとよまじぎにもあらねど、しかナヌカ
ヲといへばいはんよりは、七夕にといふべければなり。万葉に、歌レ聲ヲ、歌レ舞
体言なり。

三三九

天河とはきわたりはなけれどてあらねども 朗詠集も君がふなでは年にこそまで

○此歌万葉卷十に出たり。君がふなでは、彦星の舟出なり。織女の心になりてよめるなり。遠き渡にはあらざれども、君がたしかに船出ふねし給ふをは、一年かゝりて待といふ意なり。同卷万に「わたりもりはや舟わたせ一とせにふたゝびかよふ君ならなくに、卷八に「袖ふらば見もかはしつべく近けれどわたるすべなし秋にしあらねば、などあるをも引合せて見るべし。

二四〇

あまの川岩こそ波のたちあつゝ秋の七日のけふをしぞまつ

○織女の、立て見居て見、七月七日を待となり。二ノ句つゝの辭にて、頻シヤリに立居して待わぶる意聞えてあはれなり。初二ノ句は、序ながらよせある事を以てあやとせるなり。拾遺歌「秋風に夜のふけゆけは天川かはせの波のたちあこそまで。

紀とものり

二四一

けふよりは天のかはらはあせなもんそよとむとも 六帖こひともなくたよわたりなん(十二ま)

○今日よりは天川は浅くなれかし。水だにあせなば、舟よ橋よなど云旁もなく、淵瀬をもたどらずして心やすく、直涉スラツリにしば／＼かちより渡り通はんをといふなるべし。初ノ句、今日よりはといへるは、七日の夜に彦星の逢ひて、別んとするをりに、天川の水だにあせなば、此後も、かくしば／＼渡来てあひ見んと、云意にていへりと聞ゆるなり。此句、けふよりやとある本もあれども、異本又一本六帖家集などに、皆はとあり。まことにやにては、てにをはとゝのはざれば、きはめてやは誤なり。はの方を用ふべ

し。天の川原は、たと天の川の意なり。万葉マンヤクなどにも、海原ウミノハラ国原ともありて、はらとは広く平らけき所をすべて云事なり。原ノ字に泥て、原野の事とのみ思ふは非なり。

あせは、浅く変るナを云事、今の世にてもいへるに同じ。なほ万葉卷(十三)六に、「しまらくも行て見てしが神名火の淵はあさびて瀬にかなるらん、とあるあさびと同意なり。四ノ句、そこひは、水の下底ソコにて、そこひともなくは、水ありとだに思はずといはんが如し。さて此四ノ句、行成卿の筆といへるには、

そよみともなくとありしよし、為家卿の正義に見えたり。家集の異本にもそよみともとあり。六帖にはよどむともなく、家集流布の本にはうき瀬ともなく、家持集といふものには淵瀬ともなくとあり。二条家の本といふにも、淵瀬ともとあるよしなり。淵瀬ともとあるは、中によく聞ゆれども、今は本書の底ひに従へ

り。かくても聞えざる。にあらねばなり。然れども僻按抄に、愚本そこゐともなくと云説を可レ用。そよみとは、それよ水ともなく

渡らんと云心といふ。但、老後行成大納言筆を見るに、そよみと侍れば、其説につくべしと見(十三)え、正義にも、師説云、家本には、そこゐともなくと云説を用侍り。或本には、そよみともなくたどわたりなんとあり。其は水ともなくわたらんと云心を云。但、行成大納言の筆に、そよみとかゝれたれば、其説に付べし。そよみとは、そよ水戸なり。そよは詞のやすめなり。水戸は水のふかきおきなりとあり。かく

て躬恒集に、「そよみなく見る君なれど彦星のけふまぢ出たるこゝちのみして、といふ歌もあれば、そよみといふ詞もよしあるさまにはあれど、此躬恒集の歌は、それよ水ともこの意とも、そよ水戸の意とも聞えず。そよ水戸の方はここに心ゆかぬやうに寛ゆ。猶例もあるべけれど、いまだ思ひ得ざれば、よくよく考ふべきなり。たどわたりは、直ナツ涉セツにて、川の淵瀬をも思はず、彼方の岸へのみ心ざして、真直マナジに歩行カキより渡る事と聞ゆ。さるは、た

ど早くあひ見まほし(十三)きあまりのすさびにて、身の危からん事なども志たるさましるくて、いと

あはれなり。万葉十四上野歌「とね川の川瀬もしらずたゞわたり波にあふのすあへる君かも、貫之集「天の川水たえせなんかさ鷺の橋をししらずたゞわたりなんなども見えたり。

よみ人しらず

二四三

天川ながれてこふるたなばたの涙なるらし秋のしら露

○初句は、流てといはん料の序なり。ながれて恋るは、長の月日を恋るなり。ながれば、長程(ナガラ)への意なる事、上にいへるが如し。

二四二

天川せごの白なみたかけれどたゞわたり来ぬまつにくるしみ

○此歌も万葉十に出たり。こは彦星の心にていへるなり。織女の迎へ舟を待かねて、天川の波高きをもいとはず、かちより直渉オクワタリして来キてキ四さレれりとなり。

二四一

秋くれば川霧わたる天川かはかみ見つゝこふる日のおほき

○此歌も万葉十にあり。こは織女の、彦星を待なり。四ノ句は、万葉に川尔向意ナキキテとあるを、伝へ誤れるなるべし。川上カミといふ事、さしも用なければなり。

二四〇

あまの河こひしぎせにぞ渡ぬるたぎつ涙に袖はぬれつゝ

○恋しぎせにぞは、恋しと思ひつめたる最中オサナキにといはんが如し。此類のせの詞の事、上に委オくいへり。たぎつ涙には、沸オキり流るゝ涙になり。たぎつタギツ文字濁るべし。たぎつ類といふも同じく、万葉にたぎち流るゝと云詞もあり。滝をタギとよむ。水のたぎち流るゝものなればなり。これら万葉の仮字書に、多類と云へるへき字を書たる下てさるゝ入し。

二四六

たなばたの年とはいはじ天河くも立わたりいざ乱なん（十四）

○抄には、七日ばかりと定めずとも、乱て渡らんとなり。忍び兼たる心なるべしとあり。此意ならんには、彗星の心になりていへるなり。されどかくては、初句たなばたのと云事、いかゞに聞ゆるなり。こは例の、七夕ナツノヒメによめる、己が恋歌にて、初句は、織女タニメの如くと云意なるべし。織女の如く年のわたりといはじ。いざさらば往て逢はんと云なるべし。四ノ句の雲は、たちわたりといはん料にて、末句の乱るも縁の詞なり。乱なんは、つゝしみてのみもあらず、心にまかせて物する事なり。古今三「したにのみこふればくるし玉の緒のたえてみだれん人などがめそ、などに同じ。

おほし河内躬恒

二四七

秋の夜の長きわかれをたなばたはたてぬきにごそ思ふべらなれ（十五）

○七日の暁の歌なり。秋の夜のは、長きといはん料にて、長き別とは、二星の来年まで逢はざる別といふ意なり。たてぬきには、機ハタの糸の経緯オシノヒの意にて、さまざまに乱て、などいはんが如し。貫之集「しづはたに乱てぞ思ふ恋しさはたてぬきにしておれる我身か。

七月八日のあしたに

かねすけの朝臣

二四八

たなばたのかへるあしたの天河舟もかよはぬ波す一本もたゝなん

○舟も通はぬほどに波たゝば、彗星は掃り給ふ事かたくて、とゞまり居給はん為なに、といふなり。新続古

今又兼「たなばたをわたして後は天の川波高きまで風もふかなん。さて此歌に、たなばたのかへるあした、
新編古今にも、「織女を渡して後、とあるは心得ず。かならずひこぼしのとこそあるべけれ。こはもと彦星とありしを、彦星も
 織女も、二星に通た(十五)なばたとよむ事と心得誤たる人の、写誤たるにもあるべし。
又はやく此兼備脚の比より、
 たなばたは、二星に通はしたる等(ナ)の如くなりたるか、或は七夕と書て、ひこぼしともたなばたとも、
 所記したがひてよむ事となりたるよりの誤にか、いづれにしてもひがことなり。

おなじこゝろを

貫之

三〇

あさとあけてながめやすらんだなばたはあかぬ別の空をこひつゝ

〇あさとあけては、朝戸明てなり。彦星を出しやりて、やがてなごり恋しくながめ居給ふらんとなり。

思ふ事侍て

よみ人しらす

三一

秋風のふけばさすがにわびしきは世のことわりと思ふものから

〇三ノ句わびしきは、はた一本又正義一本又正義に、わびしはたとある方よろし。こは又の一本に、わびしきかとあれ
 ば、もしは、ははかの誤にて、わびしき(十六)かなの意ならんかとも思ひつれど、猶一本にははたと有
 て、玉緒にもはたの方正しきよしをいはれ、正義にもはたは将字なり、文章に云心ともいへり。但たよ又
 々と云心成べし。「夕ぐれは萩吹風の音まさる今はたいかにねぎめせられん。此歌は新古今後中書王、此両論
 に出たり」を聞給ひて、しばし打案て、只又の心なるべしとぞ有けると見えて、此正義に、縣居ノ大人の書入られた
 るにも、はたは又なり。歎息する所に遣詞なり。あゝまたといふこゝろなりとあれば、はたの方を用ふべ
 し。然れども、此てにをはの事麁唐は、猶きは方よろしかるへきよしの説ありて、此説も然るべく思は

る。そは追考にいふべし。一首の意は、秋の物悲しくわびしきは、世上の常理ぞとは思ふ物ながら、秋風のふけばさすがに又わびしく思はるとなり。かくて、は(十六)と云詞は、万葉考別記(巻一)の「夕よしの山の爲雲(ハタ)やこよもの我(ハタ)がひとりねむ」と有所云、こゝに爲雲也と書しは、今夜も果して独ねんやてふ意を得て書たるなり。故にいにしへより、此三字をはたやと訓つ。然れば、波太は果しててふ言ぞとすめり。常にはたと当るといふは、行はてゝ物に当る事にて、終にといふに近し。さて其果してを本にて、さし当る事にも、打つけにてふ事にも転じいへり。卷十五(卷ナリ)に、「さを鹿の鳴なる山を越ゆかん日だにや君に當あはざらん。古今歌集に、「わびぬれば今はたおなじ難波なる身をつくしてもあはんとぞ思ふ。是らは果してなり。卷十一(十五)に、「命あらば逢こともあらん吾ゆゑに波太奈於毛比曾(當勿命だに経ば。古今集に、郭公の初て、「ほととぎす鳴声きけばあぢきなくぬし定らぬ恋せらるはた。是らは打つけにと心(十七)と得て聞ゆ。同集に、「ほととぎす人待山に鳴なれば我うちつけに恋まさりけり、といへると、右のを合せ見よ。はたは、又てふ言とする人あれど、同じからぬなり」といはれたるは、まことにさる事なるべし。然れども俗言には、はたと云詞なれば、

はたと云詞なれば、はたの詞にあつる俗言は、又といふより外なきがゆゑに、遠鏡にも皆、マタと訳されたるものなり。
すべて雅言にては明(つ)るはのちがふことをも、俗言にては、一つに以上多くありて、俗言に取(ウツ)さんとすれば、其所に違ひたるおもふに依ひて、よ其勝勢を味ひ見て取(ウツ)れば、かなはざる事なり。此等は、遠鏡のはじめにも、要くいはれたるが如し。かくていづれの詞も、其詞の本より委く解(く)く時は、転(ウツ)つたる末々の事々も、よく心得らるゝ心なり。初(ハツ)たる末々の心なり。たしかに心得がたき事多かるものなり。其方論のためには、道鏡のごとく、よく勝勢を得、復言に取(ウツ)つたる事なり。遠鏡に於ては、いかなる初(ハツ)の心なり。其歌の意、たしかに心得がたき事多かるものなり。其方論のためには、道鏡のごとく、よく勝勢を得、復言に取(ウツ)つたる事なり。然れども、又(十七)此道鏡よりにのみ心得る時は、或は其詞のうつりての末の意を取(ウツ)つたるのみを見ては、もとの意に通へる所に至て、違はしく、此所に通へるさまと、彼歌にいひたるさまとは、勝勢の異なるを、其勝勢を得て取(ウツ)したる事を心得ざれば、いかにかたかたふるゝよしもある事なり。さるは、のみと云詞を、ヒタモノとも、常任とも、バツカリとも、なほの言を、ヤハリとも、マダとも取(ウツ)したる類をいふなり。此俗言に取(ウツ)していふと、詞の本よりいふと二つを、物にたとへていへば、藤原(藤原)大人の如く、詞の本より委く雅言を以て解(く)くは、玉の有(あ)るさまを玉と書さんとする時、玉の玉は、藤原の取出たる他の玉も、たしかに見わく事かたくして、たやすくは心得がたき事もあるなり。又鈴屋(鈴屋)大人の如く、復言に取(ウツ)して示す時は、玉のありさまを、いとよく似て、復言は誰も違ひなれたる事、石は誰も目に近く見馴たる物に取(ウツ)して示す

見るより、げにと心の塵によく得らるゝなり、されば注釈といふ物、かゝれば上本に挙たる、万葉考と遠鏡との説、ふと見ては違
 たのまんほどの初学ならんには、一方にはかたよるまじき事なり、かゝれば上本に挙たる、万葉考と遠鏡との説、ふと見ては違
 へるが如くなれども、猶然らずよく／＼心得る時は、同じ意におつる事なり。いづれの詞も、今いふ所を
 よく（十八）考へ見て心得べし。

だいしらず

二五

松むしの初こゑさそふ秋風はおと山よりふきそめてけり

○抄には、音羽山にて松虫を聞そめたる当意をよめるなるべし、音羽山は、山科にも清水にも比叡の山に
 もあり、音羽と云に付てなりとあり。今思ふに、音羽山にて松虫を聞そめたるといへるは、すこしこまや
 かに過たるさまなり。松虫を聞たる所は、いづくにてもあれ、松虫の声をきくにつけて、山のけしきを見
 やりて、感じたる意と見ん方、一首のさまさるべし。又、音羽と云に付てとあるも過たり。音羽といふ
 を、松虫の音ユの事にかけたるにもあらず。しかこまやかに見ては、歌さまいたくおとるべし。古今夏に、
 「音羽山けさこえくれば（十八）時鳥梢はるかに今ぞ鳴なる、とあるを、音羽山といへるに、郭公の声の意
 はなしと、鈴屋ノ大人のいはれたるをも、引合せて思ふべし。かくて一首の意は、もはや此あたりにては
 松虫が鳴初るなるが、音羽山のあたりを見れば、まことに秋のけしきに成たり。さては此松虫のこゑをさ
 そふ秋風は、彼音羽山より吹初たるよな、といふなるべし。其けしき見るが如き歌なり。

葉平朝臣

二五

ゆく螢雲のうへまでいぬべくは秋風ふくとかりにつげこせ

三三

秋風の草葉（異種葉 六帖）そよぎて（野べ 一本）ふくなべ（一本）にほのかにしつるひぐらしの声

よみ人しらず

○今目前にて、飛のぼる螢の、かぎりもなく高くあがるさまなるが、雲の上まで往（オウ）にてあるならば、雲上の雁に、世ははや秋風吹たり、汝がわたるべき時節ぞと告（ツツ）て、早く雁をおこせとなるべし。夜半（オウ）はか十九（オウ）むりいと涼しき端居に、螢の空高く飛のぼるを見て、うちつけに秋風ふきぬと覚ゆるにつけて、さは雁の来べき時になりたり、とくも来（オウ）なんと思ふまゝに、やがて螢にことつてやるおもふぎ、まことに此卿の意詞、たぐひもなきみやびなるべし。よく味ひ見るべき事なり。

此歌、伊勢物語（四）には、昔、男ありけり。人のむすめのかしづく、いかで此男に物いはんと思ひけり。うち出ん事のかたくやありけん。物やみになりて、死ぬべき時にかくこそ思ひしかといひけるを、親聞つけて、なく／＼つげたりければ、まどひ来りけれど、死ければ、つれづれとこもりをりけり。時はみな月のつごもり、いとあつきころほひに、よひはあそびをりて、夜ふけてやゝすゞしき風ふきけり。螢たかうとびあがる。此男見ふせりて、「ゆくほたる雲の上まで（云）。「くれ（十九）がたき夏の日ぐらしながむればそのことゝなく物ぞ悲しき。」とあり。此、人のむすめの（云）は、例の作物語なれば、體にはとりがたけれど、時はみな月の晦日といふより以下は、此歌の意を得んに、便ありて覚ゆれば引出たり。

○秋の夕方に、風が草葉にそよ／＼とおとづるゝにつれて、ひぐらしの声もほのかにしつるとなり。ひぐらしは、和名抄に茅蜩。尔雅注云。茅蜩。一名ハ蠶。（子別反、和名、比久良之）小青蟬也とあり。我が吉田などにて、伊勢蟬とも云て、伊勢の朝熊山などに多くありて、鳴声は、ミン／＼と聞ゆる蟬を、ひぐらしなりといへ

ど、何國にてもしかいふ事にやしらず。又二千三國により所によりては、今もたしかに、これぞとしられたる所もあるべし。もとよりさしもしりがたき物にもあらざれども、おのれはいまだたしかに知らざるなり。又かゝる物の名などは、其所々にて、彼是のたがひもあり。或は後世にこざかしきものゝ、しひてその物ぞと、おし定めたる事も多かるものなれば、今世にいふを以て、古へのに、たしかに当れりやあたらずやはしりがたし。又小さき蟬の、秋の初よりもはらになく、其声は、ツク／＼ホウシと聞ゆるがあるを、ひぐらしなりといふものもあれど、そは和名抄にも、蛸蟻。云々、和名久豆久豆保字、之、八月二蟬者也。と、別に見えたれば、もとより異物なるべし。かくて、古今集願注に、夕方に鳴なりとあるは、さる事なれども、拾遺續上に、「朝ぼらけ日ぐらしの声聞ゆなりこやあけぐれと人のいふらん、ともあれば、夕二千三方にはかぎらざるよし、契沖阿蘭梨いはれたり。されどひぐらしとしも名におふせたるをおもへば、むねとは夕方になくなるべし。

三語

日ぐらしの声きく山のは 異又六帖近けれや鳴つるなべにいり日さしけん 大帖さすらむ

つらゆき

〇日ぐらしと云を、日を暮さする虫の意にいひなして、末句は、即その日をくらさする虫の鳴く山の入り影なり。三ノ句、近けれやとは、声聞くといふよりいへるにて、深き意なく、一首の意は、日をくらさする虫のなく山が近きゆゑにや、なく声につれて、即その山より、暮るゝ入日影のさす事よとなるべしと、我友竹村ノ尚規いへりき。古今上秋「日ぐらしの鳴つるなべに日はくれぬと思ふは山のかげにぞ有ける。

近けれや、近ければこやの意にて、末句の白んは、即此の結となり。此れやの辭の事、委くいはまほしけれと、此の辭には、(二十一オ)さんありて、つまひらかたいはんは、いたく事長ければ略り、玉蟬、玉の巻廿葉以下を異て、よくむきまふべし、く

よみ人しらず

三五

日ぐらしの声きくからに松むしの名音一本にのみ人を思ふころかな

○日ぐらしも松虫も、ともに夕方に鳴出る虫の声を聞いて、恋の情を催したるを、上下にわけておきて、夕暮の意と、待意とをきかせたるなり。古今三「こめやとはおもふものから日ぐらしの鳴くゆふぐればたちまたれつゝ。」

三五

心ありて鳴くらすかもしつるか日ぐらしのいづれも物は異のあきてうければ一本又一本

○今茅チヂシ觸の鳴くを聞くに、かれも心に憂き事ありて鳴たる事なるか。秋の夕べは、誰も心のうみ情て、憂はしく思ふをりからなれば、といふにて、日ぐらしの鳴を聞いて、我が憂き事ある心にくらべて、思ひやりアキヤニエニエッッたるなるべし。一本に末句、秋はとある方はことによく聞ゆ。誰も秋は物のうき時節なれば、と云意なればなり。四ノ句異本に、物はとある方はおとるべし。

三五

秋風のふきくるよひはきりくす草むらの根ごとに声思ふなりみだれけり大帖

○一首の意は明らかなり。きりくすは、和名抄に、蟋蟀。一名ハ葦。和名、木虱、木虱須。とありて、つどりさせとなくといふものなり。實業万葉集「秋風にはころびぬらし藤 神つゞりさせとてきりくすなく、こころぎといふも同じ虫にて、俗には、イトどとも、カンナゴともいへり。秋の初つかた、野に鳴出るより、やゝ寒くなるにしたがひて、人の庭にも、家の中、床の下などにも入来てなく事、詩の幽風七月に、七月在野、八月在宇、九月在戸、十月蟋蟀入我ムカガ牀下。」とあるが如し。彼が鳴声の、きりくすと聞ゆるによりて、きりくすとは名をニエニエおふせたるにやあ

らん。昔家万葉に、「かりがねの羽風を寒み促織の昔子まく音のきりく」とする、とあるもやゝ似たる事なり。万葉に、總輝と書たるは、昔古縁巨木とよむべきよし、願屋ノ大人のいはれたるによりて、總輝は、こほるぎとのみよむ事と思ふはかたよれり、委くは、略解巻ノ十の上に見えたるを、ひらき見てさとするべし。事長ければ此所にははぶけり。

三六

我如くものやかなしききりくす草のやどりに声たえすなく

○趣意明らかなり。古今上秋「秋の世のあくるもしらずなくむしは我がごと物や悲しかるらん。猶思ふに、四ノ句、草のやどりにといへるは、我が舊の宿にとちこもり居るさまを、思ひよせていへるにもあらんか。

三五

こんといひしほどや過ぬる秋の野に誰まつむしぞ声の悲しき六帖

○四ノ句、一本に誰まつむしのとあれども、そは誤なり。そならでは一首(三十二)とゝのはず。一首の意はかくれたる所なし。朗詠集に、「今こんと誰たのめけん秋の夜をあかし兼つゝ松虫のなく。

三〇

秋の野に我宿に一本来やどる人もおもほえず誰をまつむしこゝら鳴らん

○きやどるは、来て宿るなり。おもほえずは、不覚と云に近く、こゝらは、数多く擬連なるやうの意にて、俗言に訳しては、シカリ類ニと云に近し。初句は、一本我宿にとある方まさりては聞ゆれども、こは又の一本にて、秋の野にとある方多ければ、此方を誤なりとはすべからず。古今上「もみぢ葉の散てつもれる我宿にたれをまつむしこゝらなくらん。こゝらといふ詞は、こゝたとも、万葉に擬軒などかけりこぎたとも、こゝばくそこばくそこらなども云て、何れも物の数多き意にて、いさゝかづゝの違ひあり。巨々等の字音と思ふ

の誤なる事は、契（二十三）沖法師も、縣居鈴屋の大人たちもいはれたり。猶此詞、下羅維三に見えたるなどをも見合すべし。

二二

秋風のやゝふきしけば野をさむみわびしき声虫ぞ鳴なるに松虫ぞなく六帖又一本

○やゝは、漸ナなり。俗言に、ソロ／＼次第二シタイといふ意なり。吹しけばゝ、吹しきればなり。下秋中に、「白露に風の吹しく秋の野は」と皆同じ。六帖「秋風のやゝふきしけばきり／＼すうべもよもぎの宿をかるらし。末句は、六帖また一本な

ふじはらの元善朝臣

二三

秋くれば野もせに虫のおりみだる声つめるのあやをばたれかきるらむ六帖

○野もせは、野も狭セきほどにと云意なり。虫の声の野に満ミて聞ゆるを、野も狭セにといひなし、いと多く声の充トて、縦横ウツクヨコに聞ゆるを、織オリり乱るミ（二十三）とはいへるなり。菅家万葉「夕暮に聞みだれます秋の虫何か悲しき我ならなくに」ひなして、彼虫の織乱る綾をば、誰か着るらんとなり。二三ノ句は、たゞ秋の野にて鳴く、多くの虫の事にて、促織ハナオムシのみの事にはあらず。菅家万葉、「雁がねにくだまとおとの夜をさむみ虫のおり服衣ウツムネをぞ飯イハ。野もせ道もせ庭もせ、又所せきなどの詞、皆狭きまで物の充満ミたる意なるよし、玉露に見えたり。

二四

風さむみなく松秋虫むしの涙こそ草葉の上に露をいろどる露露乃又一本とおくらめよみ人不知

○古今下秋「秋の夜の露をはつゆとおきながらかりのなみだや野べをそむらん。

三四 秋風のふきしく松は山ながら波たちかへるおとぞ蘭ゆる(二十四)

○ふきしくは、例の吹しきる風なり。信明集「うちつけになぎさの岡の松風を空にも波のたつかとぞきく。

是貞親王の家の歌合に

○此詞書、家集には、松風を聞てとあり。異本家集には、今と同じ。

壬生忠岑
らめ 曹万

三五 松のねに風をのしらべをまかせては竜田姫こそ秋はひくらしらめ 曹万

○此歌の初二ノ句、異本家集には、松のえを、流布の家集には、三ノ句あはせては、一本には、風の心を、昔家万葉には、松之声緒風之調丹ナツメ、末句、秋者弾良咩ヒツナとあり。今思ふに、本集のまゝにても、聞えざるにはあらねど、猶初句の「文字と、二ノ句の文字と、かたみにおだやかならぬこゝちするを、昔家万葉に、「松のねを風のしらべ」とあるは、此とりくの（二十四）中にてよろしかるべく思はるれば、此方に従ふべし。かくて一首の意は、松の声の風にしたがひて、高くも低くも、いろくくになるを、琴の音に聞なして、さて竜田姫は秋をつかさどれば、此松風の琴をば、立田姫の弾なるべしといふなり。拾遺名物「松のねは秋のしらべに聞ゆなりたかくせめあげて風にひくらし。重之集「白波のよりくる糸を緒に上げて風にしらぶる琴ひきの松。竜田姫を秋の神と申す事は、立田は奈良ノ京の西に有て立田姫と申す神坐スより云ヒ、それに対へて、佐保は東にあるを以て、春にとりて、佐保姫と三名を敷けたるなるべく、奈良の京の國云出たる事なるべきよし、古事記配傳廿二ノ巻に見えた又思ふに、此歌、立田彦竜田姫は、風の神におはすれば、秋風の松に吹よせて、えならぬ音をたつる

も、即此神の御心なるべしと、巧に思ひよせられたるにもあらんか。

秋、大輔が、うづまさのかたはらなる家に侍けるに、萩の葉に文を二五五まましてつかはしける

○秋、とよみ切て、大輔が云々と心得べし。下秋中にも、此類の詞書あり。見合すべし。大輔は保明親王の御乳母にて、但馬守源たすくが女といへり。うづ太まさは、京ノ二条通の西にて、洛外なり。此所を禹都ウツツ萬佐マンサといふ初の事は、姓氏録、左京諸蕃上、漢の部、太秦公宿祢の条に見えて、古事記傳三十三に引出て、ことに委あづかりはれたり。草木などに文をさすとは、其書たる紙をたゞみわけて、枝などに、其わけめを挿ウツたるを云。つけてといふも似たる事ながら、それは、紙カミよりにて糸にても、結び付たるを云と、縣居ノ大人いはれたり。

左大臣 (二五五)

三六 山ざとの物さびしきはをぎの葉のなびくごとにぞ思ひやらるゝ

○我宿の、此の萩の葉の、此節の秋風に、音たてゝなびくの、いとさびしきたびごとに、山里はさぞかしと、そなたの事の思ひやらるゝ事よとなり。太秦は、京遠き所にはあらねど、城外なれば、山里とはのたまひしなり。すべて山里とは、別業山莊などを、常に山里といひならへり。

題しらす

小野道風朝臣

三七

ほにはいでぬいかにかせまし花薄身を秋風にすてやしなましはて真む

○抄には、ほには出ぬは、畢ぬなり。世に身をうんじて、捨やせんと思へど、何となくうち過るに、花薄

も穂に出、秋風も吹頃になりて、ふと思ひ催されてよめる心なるべしとあり。げに下ノ句、身を秋風にとある(二十六才)たる秋に我をうき身なりと、歌に「ア」などは、此意のやうにも聞ゆ。されど猶思ふに、こは恋の歌にて、初句は、包みたる事の頭はれたるを云なるべし。出ぬは、出處にて、不出へい包める思ひなど、色に出て頭はれ、言に出て頭はす類の事を、穂に出づといへるは常にて、万葉三「見渡せば明石の浦にともす火のほにぞ出ぬる妹に恋ふらく、古今三「花薄ほに出てこひば名をくしみ下ゆふひものむすぼくれつ、下二「葉をかみほにこそ出ね花すゝきしたの心にむすばざらめや、小大君集「はな薄ほに出にけり我いかで人にしられてむすぶわざせん、など猶多かり。かゝれば、一首の意は、是までは包みたることの、頭はれはしたり。然ればと思ふまゝにもなしがたし。今はいかにかせん。もはやせん方もなき筋になりたれば、今は、秋風に薄の枯失(カレヌ)る如く、我身をも、いたづらにやはぶらかし果ん、と云意の如く聞ゆるなり。かく見る時は、四ノ句は、身を厭(ア)く事にかけたるにはあらず。薄の穂に出たるが、風に散失する、たとへの方にのみ云へるなり。一本に、「穂に出ばとある方、まされりとはなけれど、かくては恋の意なる事は、いよ／＼うたがひなし。

ふたりの男に物いひける女の、ひとりにつきにければ、今一人がいひ遣しける

よみ人しらず

三六 あけくらしまもるたのみをからせつか一本たもとそほづの身とぞ成ぬる

○田イ稲ホの守ジにこしらへおかれたるかゞしが、朝夕守ジをして居る稲を、人に刈取らせて後は、たゞ一人跡に残て、雨露にのみ濡シて居る如く、我も、君をのみ頼に、明暮守たるに、其君を人にとられたれば、今は一(二十七才)人袖をぬらすのみの身になりたる事よとなり。又一本の、かゝせつ加なれば、令セ懸カ處カの義に

三九

心もおふる山田のひつち穂は君まもらねどかる人もなし（二十八）

返し

○耕作（フツゾク）たる稲（イネ）こそ刈る人もあれ、実（ミ）もなき稲をは、誰（タレ）かは刈（カ）侍らん。其如く、我も刈田の跡へ生（ハ）たる、ひつち稲の如き身なれば、君が守り給はずとも、手（テ）をふる人も侍らずと云て、かの一人の男につきたる事を、隠し遁れたるなり。ひつちは和名抄に、種（タネ）、（音呂、後撰集種抄於略置、於此、俗云、比豆如）自生（ミナ）スル稲也。とありて、一度刈たる

て、女の身をうち任せて、頼をかくるさまなるゆゑに、男もさやうに思ひたるが、即たのみを令（カ）懸れたるなり。朝夕に、我に頼をかくるよしをのみいひなどする故に、まことにさやうぞと思ひて、我こそ其方（ソノカタ）の、頼（カ）の懸處（カケドコロ）よと思ひ居たるに、思ひの外に、今かく袂（タビ）そほづの身となりたる事よといふなり。田突（タノツキ）に頼をかけ、稲（イネ）の守（マ）をするかゞしに、濡るゝ事をそほづといふ詞をかけたなり。そほづは、古事記に、所謂久延（イハレノキハレ）毘古者（ヒコノハ）、於今者山田之曾富騰者也。（イマノキハレノヤマノノソコフツナレノモノナリ）とある傳（ツラシメ）十四（ナニ）の六に、當時久延（ツラシメノキハレ）毘古と云しは、即今ノ世に至るまで、山田の曾富騰（ソコフツナレ）とて有物是なりと云意なり。然れば、久延毘古即曾富騰（ソコフツナレ）の事なり。さて曾富騰は、後の歌に曾富豆（ソコフツナレ）とよめる物にて、清輔（ソコフツナレ）（二十七）朝臣の奥義抄に、田におどろかしに立たる人形なりといへり。古今集に、「足引の山田の曾富豆（ソコフツナレ）己さへ我をほしといふうれはしきこと、後撰集に、「あけくらし（ソコフツナレ）拾遺集（ソコフツナレ）に、「小山田を、人に任せて、我は只、袂（タビ）そほづに、身をなして（ソコフツナレ）云、曾祢（ソコフツナレ）ノ好忠ノ集に、「山田守そほづもいまはながめすな舟屋形より穂さき見ゆめり、などよめり。名ノ義は、或人、雨露（ウツロ）に所沾（ソコフツナレ）そほちて立てる由なりといへり。今按に、曾富豆といふは後の事にて、本は曾富騰なれば、そほち人てふ意にや、と見えたり。（此そほづの事は、細注にすべきなれど、別につけたる仮字など、あまりに小さく、見わきがたきやうになれば、かく、本注に引づけては疑したり。此類の事、上下の巻々にも、まれにはあるを、見ん人、凡例に違へりとながめそ。）

稲蓋イナガイより、又葉の出るをも、又只、おのづから生たるをいふさまなり。古今下「かれる田におふるひつぢのほに出ぬは世を今さらに秋はてぬとか、六帖「秋はてゝ人も手ふれぬひつぢ穂の我が心もておひ出にけり、など見えたり。」

題しらず

藤原守文

三〇〇

草コノハのいとにぬく白玉と見えつるは秋のむすべる露にぞありける

○草の糸に、真の玉を買きたりと見えたるは、初句の糸の縁の語なり。されどこは詞の縁のみにて、一首の意にかゝる事にはあらず。意意の方にては、おけるといはんも同じ事なり。下秋中には、「秋の野の草は糸とも見えなくにおく白露を玉とぬくらん、ともいへり。」

後撰和歌集卷第五新抄(二十九)